

## なっちゃん隊 深掘りレポート Vol. 1 十勝の開拓

連続テレビ小説「なつぞら」の舞台となる十勝。

物語は、主人公の“なつ”が十勝の開拓移民の一家と生活を共にするところから始まります。

十勝の開拓とはどのようなものだったのか、振興局なっちゃん隊が調べてみました。



北海道の開拓といえば、国が開拓と国土防衛のために進めた屯田兵が有名ですが、十勝の開拓は屯田兵ではなく、明治16年（1883年）に帯広に入植した依田勉三の率いる晩成社などに代表される本州からの民間の開拓移民の手により進んだことが大きな特徴です。

晩成社を率いた依田勉三は、農業のほかバター製造などに挑戦しましたが、冷害やバツタの襲来などもあり、事業としては失敗に終わりました。



しかし、この挑戦は、十勝の発展に大きな功績を残します。人気のマルセイバターサンドは晩成社のバター缶がモチーフですね。



晩成社の入植によって、現在の国道38号線沿いには帯広などの集落が形成されました。また、明治中期からは、十勝監獄の囚人による道路や施設の建設が進みました。こうした社会インフラの整備が人々の生活を支え、現在の帯広市街地の基礎へと繋がります。

かつて、十勝監獄のあった緑ヶ丘公園（帯広市内）には、開拓の歴史のほか、十勝の自然、農業の発展などを学ぶことができる帯広百年記念館があります。

依田勉三や晩成社の資料もたくさん展示されていますので、ぜひ足を運んでみてください。

